



○3学期始業式講話「自分に挑む戦い」 台湾で販売された雪姫舞→

令和4年の世相を表す漢字は「戦」でした。今年はどうな漢字の世相となるのでしょうか。未来がイメージできる漢字の1年であることを願うとともに、一人一人が夢を追いあきらめず挑「戦」する1年にして欲しいと思います。

ウクライナの児童文学作家であるオルロフ氏原作の『ハリネズミと金貨』という絵本があります。あらすじは「ハリネズミのおじさんが道で金貨を拾いました。冬眠に備えて、その金貨で必要なものを買おうとする道中、次々と出会う動物たちが必要なものを譲ってくれるので金貨は使いませんでした。」というお話です。お金本来の意味、なにより人と人が寄り添い助け合い生きることの大切さに気づかせてくれます。

ロシアのユーリ・ノルシュテイン作の『霧の中のはりねずみ』という絵本があります。「日が沈んで薄暗くなってきた頃、はりねずみが、野いちごのはちみつ煮を持って仲良くぐまのところへ行こうとしますが、その途中立ち込める霧の中で道に迷ってしまいます。しかし、いろんな動物が寄り添い助けてくれ、なんとかぐまのところまで行くことができました。」というお話です。

戦争の当時国の絵本です。絵本からは、やさしさや寄り添う気持ちしか見えてきません。

ちなみに一番好きな絵本は、『ぼくはぐまのままでいたかったのに…』というスイスの絵本です。現代社会の授業で、環境問題を扱うときなどに使ったことがあります。あらすじは「平和な森に人間がきて、木を切りたおして工場を建設。森で冬眠していたクマが目覚めて出ていくと、工場の労働者にされてしまう。」というお話です。自分のことはわかっているつもりなのに、やりたいこともあるのに、言われるがまま行動していたら、アイデンティティを、つまり熊が熊であることを見失っていきます。自分の意志にかかわらず自分が自分でなくなってしまう現実。見失わないためにはなにが大切だったのでしょうか。戦争は、人が人でなくなってしまうものだと思います。

台湾の百貨店で、分校生徒が関わった雲南の焰米(雪姫舞)が販売されました。その台湾には徴兵制がありましたが、2018年から4か月間の軍事訓練の義務だけにしました。しかし、中国が台湾に対する圧力を強めていることや、ロシアのウクライナ侵攻を受け、2024年から兵役を1年に延長すると年末に報道されました。北朝鮮では男女に徴兵制度があります。一方、サッカーのワールドカップ・カタール大会で日本が対戦したコスタリカには軍隊がありません。コスタリカの元大統領アリアス氏は、ラテンアメリカではじめてノーベル平和賞を受賞。国家予算の20%以上を教育にあてるコスタリカ。一方、日本の文教及び科学振興費は5%弱です。

ロシアの文豪トルストイ作の『戦争と平和』。1度読みましたがかなりの長編です。ナポレオンのロシア侵攻による戦争を描いていますが、戦争の中で生きがいや幸せとは何かを若者たちが考え学びながら成長していく小説です。その中の言葉に、「人間の考え方には果てしない多様性があるから、どのような真理であっても、二人の人間の頭に、同一に映ることがない」というものがあります。自分の価値観を他者に押しつけようとするのが争いの発端かもしれません。

受験戦争という言葉が昔ほど使わなくなりました。あまりいい意味では使われてこなかった言葉ですが、これを自分との戦いと考えればどうでしょう。また、戦いがお互いや自分の成長のためのものであれば、その戦いも違った見方ができます。部活動も同じです。自分がやりたいこと、めざしたいことのために挑戦し努力する。仲間とライバルと切磋琢磨する…。

3学期、令和5年がスタートします。いろいろな場面で、小さな挑戦、小さな気遣いができる人。大きな志をもって努力を重ねることができる人になってください。今年もがんばりましょう！

